

もりおか、 ふるさとのお盆

盛岡のお盆スタイル

「人によっては13日っていう人もいますが、うちは14からだね」と話すのは藤村仏具本店代表取締役の藤村義郎さん。創業146年という老舗の4代目で、古くからの風習にも詳しいであろうとお尋ねしました。地域や家によってもお盆の慣習はいろいろ。「うちのことならわかります

けどね」という前置きのものと、盛岡のお盆についてお話を伺いました。

お墓参りのこと

14日の夕方に、家の前で迎え火を焚きます。盛岡のお盆の特徴の一つとして、白樺の皮を焚くことがあげられ、そのため迎え火を、「樺火」と呼ぶこともあります。白樺の皮は、季節になると朝市や八百屋に並びます。

100年以上前から使っている玄関に飾る提灯を持つ、藤村義郎さん。

「火力が強いからでしょう。すぐ燃えますよ」と藤村さん。実際、火をつけていただくのとパツと燃え上がりました。「お盆の間は、家の中で大切な玄

関とか外のトイレ前などで焚きます。うちでは、昔あった井戸の前でも毎日樺を焚きますね。」
樺は他にはお墓の前で焚くのみで、かがり火に入れることはあまりないそうです。一度は出なくなった「かがり火台」は、10年くらい前からまた売れるようになってきたとのこと。伝統が見直されてきているようです。

うですが、他の宗派ではお煮しめ、お赤飯などを持ってお参りすることも。転勤族の方からは赤飯に驚きの声もあがるそうです。今はカラス被害などの対策でお供えを禁止するお寺もあり、用意した場合は持ち帰ることになります。

送り火の楽しみ

16日にはまたかがり火台で送り火を焚きます。「母が生きていた頃は、かがり火でみそあんの入った『かまやき』を焼いて食べました。今はうちもそうですが、やっているとところは少ないですね」
「かまやき」は小麦粉で作った半月型の餅菓子のようです。県北部に多く残っています。「背中あて」「背中あわ



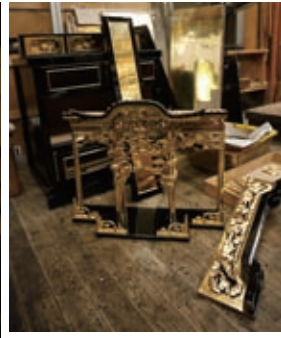
8月はお盆。仏教用語で『盂蘭盆(うらぼん)』。祖先の霊を死後の苦しみの世界から救うための仏事で、陰暦7月13日〜15日を中心に行われる行事のことをいいます。お盆行事は、地域によって日付や内容が多少異なっています。盛岡の夏の風物詩「舟(ふね)流し」は、盛岡のお盆の象徴ともいえる行事です。
ごく当たり前と思っていた盛岡のお盆が、独特なスタイルだと言われています。お盆を通して、盛岡の地域文化を見つめなおしてみませんか。



(上) 樺は筒状の状態です。内側をめくると白樺そのまま。火をつけると間に燃えまします。(左) 藤村さんのお店で売られていた子ども提灯。これに樺をつけてお墓参りに行ったものだそうです。

せ」などと呼ぶことも。また、あんを中に入れられないものを砂糖醤油をつけて食べる家もあるそうです。
お城があった頃は、桧や松などの薪を束ね、樺の皮をまいて点火した樺火の上を、騎馬武者が駆け抜ける「盆乗り」「門火乗り」と呼ばれる行事もありました。馬事文化

右から 藤村仏具本店の工房では修復と注文の最盛期。／
 あとは組むだけのお仏壇一式。工房の片隅には山車まつりの
 人形。これも制作しているとか。／両サイドに提灯を並
 べるなどにぎやかに。仏壇を整えるのは家長の仕事。／鉦
 屋町の風物詩になりつつあるかがり火。



ちなみに初盆の家では提灯
 を新しくするのが慣わし。供
 物として届ける人もいます
 し、古いものと交換したり、
 追加していつてもかまわない
 そうです。仏壇の準備は家長
 の仕事。藤村さんも手際よく
 提灯を組み立てて見せてくれ
 ました。仏壇は20日までを盆
 として拝むのだそうです。
 宗派によって違うものの、
 施餓鬼棚せがきごななといって、仏壇から

「住宅様式が変わってお仏
 壇も小さくなってきたり、洋
 間に合わせたデザインに変わ
 ってきていますが、お盆に拝
 むという習慣に変わりはない
 ように思いますね」と藤村さ
 ん。

の深い南部家なら
 ではの行事です。
**お仏壇まわりの
 こと**
 お盆には仏壇を
 きれいにし、提灯
 を飾ったり、走馬
 灯を回し、錦を敷
 き、お仏壇まわり
 をにぎやかにしま
 す。藤村さんのお
 店には仏壇の工房
 もあり、お盆前が
 注文も修復も一番
 混むそうです。

大きな電球を
 灯籠にした
 ものが掲げ
 られていま
 す。
 電球の色
 は赤と白を
 交互につけ
 るのが基本
 のようです
 が、最近

この照明は灯籠柱とうろうぼしらが進化した
 もの。主に108個の電球を
 つけることから、108灯籠
 柱と呼ぶ家もあります。新仏
 のある家で、3年間続けて立
 てることになっています。2
 階建ての家よりも高い真ん中
 の柱は、昔ながらの灯籠柱と
 して、てっぺんに杉の葉と大

床の間に位牌を移し新たな
 棚をつくる風習がいまも残っ
 ているところがあるようです。
田んぼの中に浮かぶ灯り
 8月頃に太田周辺で夕暮れ
 の中に目にするのが、赤や白
 などのきらびやかな電球がビ
 アガーデンのように輝く風景
 です。「かつては提灯を飾っ
 ていたものだと思いますよ」
 と藤村さん。観光客、転勤族
 にも新鮮な光景で、たびたび
 ブログなどでも「盆ツリー」
 と称して取り上げられます。



108灯籠柱の電球。夜景にかなり目立ちます。

例年8月16日に行われる
 「舟っこ流し」は、南部家30
 代 行信公の7番目の姫塩子
 の方(光源院殿)が大慈寺の
 住職に帰依し、「川施餓鬼」
 を実施したいと始まったもの
 と伝えられています。それが
 大洪水の後に広く町人たちも
 参加するようになりお盆の行

他の色も見かけるようになり
 ました。この電球のスタイル
 が登場するまでは、お墓から
 家までハセを組むなどして、
 108個の提灯を灯していた
 もので、消えるろうそくの火
 をつけ直すための手伝いに親
 戚が来たものだそうです。こ
 の風習は盛岡では太田地区界
 限で多く見られますが、矢
 かけることがあります。
**観光客も受け入れる
 盆行事**

全国を見ても「西馬音内の
 盆踊」「阿波踊り」など、お
 盆文化が観光の目玉となった
 地域もあります。あたりまえ
 の風習を守り、伝えていくこ
 とが地域の財産、観光資源と
 しても育つ証といえるでしょ
 う。そうした観点からも盛岡
 のお盆をはじめとする風習を
 学ぶことで、新たな地域資源
 の発見につなげたいものです。
 取材／SANS A企画編集委員会

として家々を回るものでし
 た。鉦屋町で昨年、迎え火送
 り火を一齐に焚き、そのかが
 り火の中でさんさを舞うとい
 う企画があり、多くの人が鉦
 屋町を訪れました。懐かしく
 も新しい試みです。

実は盛岡の夏祭りとして定
 着した「さんさ踊り」も、も
 ともとは旧南部領で踊られる
 「盆踊り」でした。「鹿踊り」
 「鬼剣舞」、そして「さんさ踊
 り」と、岩手に残る民俗芸能
 の多くが念仏踊りに端を発す
 るといわれ、お盆中に門付け
 事となり、夏の風物詩として
 観光客も訪れる行事に成長し
 ました。

